

六花

り
つ
か

月刊俳句雑誌

2007 15th anniversary

Rikka haikukai rockoh yamada
cover designed by masami

9月号

山田六甲

翡翠^{かわせみ}の飛び立ちてより瀧の音
突き出せる岩が碎ける瀧の水
肘^{ひじ}枕^{まくら}長^たけし蓬^{よもぎ}の上に月
夜景から吹き上げきたる秋の風
天の川杉の中なる摩耶^ぶ夫人^{にん}
橋^{げた}桁^{げた}の渦を離れず送り舟
盆舟の灯^{あかし}へ水の流れけり

堰越^{せき}ゆや精^{しよつり}靈舟の灯の消えて
水平線近く飛ぶ星恐ろしき
流星を今度は妻が見つけしよ
みんなの細身の翅^{はね}をたたみけり
己が身を抱くかに死んでゐたる蝉
湿り帯ぶ涼しさ蝉の山の風
秋風や網戸の網は見えざりき
蛾^がの掴^{つか}む網戸震へてをりにけり
熊蝉の横に這ひつつ日暮れけり

ことり

雨後の橋渡りゆく蜥蜴かな
孕みたる青蜥蜴の尾の艶なこと
夏雨を猫縁側に眺めをり
夕立晴れ土の匂ひの甘かりき
夏蝶のつながり合へるまま飛び
青鷺は羽ばたいてより青深む
砕け散る水が絡まり合うて滝
滝水に傷の蹄を浸しけり
若鮎を跳ばして閉づる水輪かな
ほととぎす空に楔を打ち込めり

白鷺は背なに光を負うて飛ぶ
白鷺の水面を打ちて飛び立てり
夏潮の香に誘はれて立つ漁港
ゆるやかに起きあがりける月見草
てのひらをすべりゆくかな夜の秋
蛇死してなほてらと日を吸へり
潮風は鉄の匂ひよ終戦忌
かなかなや雨の雫の残る枝
蝸に許されてゐる心地かな
休み休み鳴くが優しき蝸は

したたりて神のごとくに黒葡萄 田尻勝子

したたりてかみのごとくにくろぶどう

ラ・フランス良い女なり肥り肉
井戸端に虫食柿の砕けたり
五月晴湿りし橋を渡しけり
喉擦るさつまいもなり終戦日

したたりは季語の「滴り」ではなく滴るように成っている葡萄の形容。「神のごとくに」という大胆な比喩に驚かされる。黒葡萄と言ったのがまた一句を統べているようにも思わせて不思議な魅力の句としか言いようがない。彼女の作品は吾々凡人にまねの出来るものではなく、このような作品に出会うことが俳人としては幸福感に浸らせてもらえる瞬間。一本勝ち！

バナナ売

貝森 光洋

南国を見てきたようなバナナ売
 水鉄砲撃たれた時は死んだふり
 明^{あけやす}易^{やす}し夢の続きはまた明日
 川^{あけやす}沿^{やす}いを歩かせてみる白^{しろがすり}緋^{すり}
 羅^{うすもの}に振り返るまた振り替える

水切り

梶浦玲良子

父の日の短かすぎたる梯子^{はしご}かな
 夜も匂ふ爪の先^{はしご}まで栗の花
 黒板を消したる筍^{たけのこ}流^{なが}しかな
 水切りの小石を探す夕^{ゆや}焼^け雲^{ぐも}
 九分九厘ツアーまとまる涼み台

青葉風
あおばかぜ

木内美保子

山のもの全て匂へる青葉風
羽根たたむ天道虫の星光る
水音の葉先に震へ川蜻蛉
垣に添ひ風船かづらの灯る昼
夕空の藍に融けゆく桐の花

風の池

笹村政子

萍の大きく回る風の池
蓮の葉に凭れて首を出せる亀
水浸く葉へ及ぶ日差しや梅雨晴間
点りつつ沈みゆきつつ螢かな
枇杷すすする母に呼吸の乱れかな

あさがほ

水谷ひさ江

盆花ぼんばなの蓮の開かず終りけり
 空蝉うつせみの夕べの風に飛びにけり
 足早あそになる並木道蝉時雨
 あさがほの供へてありぬ初盆はつぼん会え
 ささくれれし箒で掃ける松落葉まつおちば

小田元

菊供養

菊酒きくざけや今宵は白き菊を選えみことり
 水の秋茶も不味まずかりと言ひ給たまふ
 訪とひしこと銀杏いちょう黄葉もみぢをくぐりゆき

雪樹集

新緑 池崎るり子

新緑の楠公さんのまつり力な
新緑や黒き瓦の屋根眩し
地下道を抜け新緑のひかりかな
行く春や神戸元町一期会
ビニールにくるまり朝刊梅雨に入る

目高

K O K I A

みどり 岩松八重

目高らのぶつかり合うて餌をつつく
鉢に鉢沈め目高の日除けとす
花楓仰がば雲の青かりき
川の字にもどる親子や明易し
新聞で窓割れむほど蠅打てり

一竿の産着みどりの風に干す
ふえふえん泣く児みどりの風の中
じつと見て笑つてくるる眼に青葉
喃語とか万国共通梅雨に入る
幼児と動くみどりに遊びをり

六花集

六甲選

田尻 勝子

ラ・フランス良い女なり太り肉ふと

井戸端に虫食柿の砕けたり

したたりて神のごとくに黒葡萄

五月晴湿りし橋を渡りけり

喉擦のどこするさつまいもなり終戦日

久永 つう

沙羅さらの花勤行しんぎょう肅しゆくと始まりぬ

鉄線てつせんの息づくごとく膨ふくらめる

苔こけの花岬みさきの句碑くまいを覆おおひけり

家路への別れ小路こみちを青田風あおたかぜ

似合ふかと照てれつつ問へる夏帽子